

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

井上円了の教育理念

著者	東洋大学
図書名	井上円了の教育理念
開始ページ	138
終了ページ	169
出版年月日	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011884/

井上円了の教育理念^Ⅲ

① 学校教育と社会教育

私立哲学館大学の開設

井上円了は帰国後、矢継ぎ早に三つの事業に着手した。第一は哲学館大学の開設、第二は哲学館の建設、第三は修身教会運動の開始である。すでに述べたように、これらは彼が外遊中から構想していたことであり、それぞれ独立したものではなく、彼の教育目的を実現するために密接に関係しあっていた。

彼はまず、帰国から一か月後の明治三十六年八月二十七日に、大学開設の認可申請を行った。これは十月一日に認可され、哲学館は「哲学館大学」と改称して、専門学校令による大学部が設置されることになった。明治二十三年に大学を目指して専門科設置を発表して以来およそ十四年、火災からの再建や哲学館事件という苦難の道を乗り越えて、ようやくその目標を達成したのである。

認可にともなつて、哲学館学則という従来の内部規則は、国の定めるところにしたがつて「私立哲学館大学学則」に変更された。第一条で「本校は高等なる哲学、文学等を教授する所とす」と規定し、第二条以下で新しい学制を定めている。大学部は第一科、第二科および別科からなり修業年限は五年、専門部は教育第一科、第二科、哲学第一科、第二科および別科からなり三年、また予科が一年と定められている。このうち第一科では哲学・宗教関係、第二科では国語・漢文関係の教育を行うことになっているが、第二科においても哲学や倫理などの科目が設けられていて、哲学による精神教育の重視という創立以来の方針を堅持している。また、別科というのは、中学校や師範学校などの学歴を持たない人のために、本科とは別の教育課程として設けられたものである。

明治三十七年三月二十五日に哲学館同窓大会が開催された。哲学館の講堂には井上円了ほか講師、校友、館内員多数が出席していたが、その講師の中の一人に気がついた参会者たちの間にざわめきが走り、にわかには活気がみなぎった。一年余り前、哲学館事件で辞職した中島徳蔵が、再び講師として戻ってきたのである。中島は万雷の拍手に応えて登壇し、中島流の処世法について持ち前のユーモアを交えながら講演した。

専門学校「私立哲学館大学」の開校式は、四月一日午前十時から正午まで二時間にわたって行われた。学生、卒業生のほか、来賓として石黒忠憲、加藤弘之、村上専精など五十名が参列した。この席で井上円了は、すでに制定されていた称号規程によって、哲学館創立以来学校のために尽力してきた講師のうち三名を名誉講師に推戴し、他の二十三名に謝恩状を贈呈した。

また、同日午後、参列者は哲学館に案内され、その落成式が挙行された。

哲学館の建設

井上円了は以前から、三十五年に大学部開設予定地として購入した和田山の用地（現在の中野区松が丘の哲学館公園）に、哲学館の建設をはじめていた。哲学館は「広く同窓諸子に告ぐ」で明らかにしているように、哲学館大学開設の記念であり、また哲学館事件の記念でもあった。『哲学館由来記』では、彼はスペースの約半分を費やして哲学館事件の顛末を記している。さらにこれらのほかに、修身教会の記念の意味も付け加えられた。

哲学館は四聖堂とも呼ばれた。釈迦、孔子、ソクラテス、カントの四大哲学者（四聖）

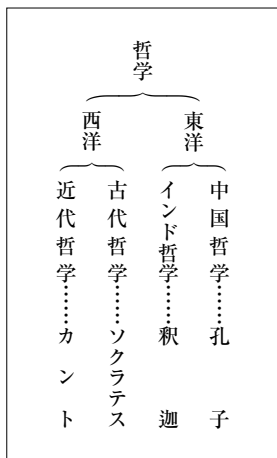


図2 四 聖

を祭っているからである。四聖の由来は、明治十八年にまでさかのぼり、その十月二十七日に行われた第一回哲学祭で、この四人を東西の哲学の代表者(図2)として祭ったのははじまりである。哲学祭は毎年のように行われ、二十六年には画家橋本雅邦によって四聖像が描かれた。

明治三十六年十一月二十三日、哲学堂が建設されると、四聖像を堂内に納める祝典が催された。当日、全校生は新宿から和田山まで徒歩で行き、井上円了の案内で敷地内を巡った。その後、学生が四聖に扮装して、四聖それぞれの原語で対話するという劇を披露した。

修身教会が設立されると、哲学堂はその本山となった。現在の哲学堂公園には四聖堂のほかにもいくつかの施設があるが、それらはのちに修身教会運動を展開していく中で建設したものである。井上円了は、全国巡講中に人々の頼みに応じて額や掛け軸などの文字を書き、それによって受けた謝

礼のうち半分を講演会の経費に充てたり、町村の公共事業や慈善事業に寄付した。そして、残りの半額を哲学堂の建築費や維持費に充てた。というのは、彼は哲学堂を修身教会の本山というだけではなく、精神的な修養に役立つ公園にしようと考えていたからである。その発想は西洋にある。彼は、西洋には体を養う公園と心を養う教会堂があり、人々は公園で半日を、教会堂で半日を過ごすことによって体と心を養っていると考え、そのようなものを哲学堂公園として実現しようとしたのである。

こうして、四聖堂からはじまった哲学堂には、六賢台、三学亭、唯物園、唯心亭、三祖苑などがつくられ、やがて一般に公開されて、彼の目的どおりの精神修養の公園となった。

修身教会の設立

井上円了は、外遊中に西洋と日本を比較し、日本の国民性を向上させなければならぬと考え、そのために道徳の普及・徹底をはかる必要を痛感した。そして、修身や道徳を教える場を「修身教会」と名付けて、学校教育以外の民間教育・社会教育に取り組んだ。

その考え方は、欧米と日本を対比した「欧州所感」で明らかにされている。彼は第一回

の洋行で見た西洋諸国はすでに十分に発展していると思っていたが、十五年ぶりに訪れてみると、さらに進歩発展していることがわかった。その原因として、西洋各国の人々は(1)質実儉約の国民で、(2)ものごとを遂行する忍耐力があり、(3)正直で信用があること、(4)貯蓄が盛んに行われていること、をあげ、これらの性質は天性のものではなく、教育薫陶の結果であり、それには学校教育以外の宗教教育が大きな役割を果たしていると分析した。

そして、日本も修身道德の教育を行うことによって、はじめて西洋文明国と肩を並べることができると考えたのである。

修身教会では「国勢民力」のレベルが西洋よりもはるかに低い現状を改革するのが目的であった。そのため、当時の国民道德の基本である教育勅語に基づいて、職業に必要な道德を論じ、また家庭における風習や行儀作法、社会の習慣を一新させようとした。ただし、注意しなければならないのは、井上円了は教育勅語を広義に解釈していたということである。勅語の基本にある忠孝の考え方は鎖国時代と比べると変わりがなく、彼はこれに博愛、独立、自営、立身、出世、自由などを加え、「遠くは欧米諸邦の道德を参照し、近くはわが邦今日の状況を酌量して、開国の国民として守るべき諸般の心得」を教

育する方法をとった。

修身教会は欧米の教会組織（監督教会と独立教会）にならって全国的な組織を張り巡らせるが、各町村単位の地方組織はそれぞれの自治によって独立して運営され、哲学堂が本山とはいうものの、それらを統轄はしないという方針であった。ただし、組織どうしの横のつながりを確保するために、雑誌を発行する。また、会場はすでに全国的組織網をもつ「寺院」の活用を考えていた。

明治三十六年九月に趣意書が発表され、翌年一月に井上円了は大学資金募集と修身教会遊説をかねて山梨県下を巡回した。このころ世相には暗雲垂れ込めており、二月十日ついに日本はロシアに対して宣戦布告し、日露戦争がはじまった。二月十一日、修身教会が結成され、哲学館内の修身教会雑誌発行所から『修身教会雑誌』第一号が発行された。以後、雑誌は毎月発行され、井上円了の巡講は夏休み期間中に行われた。

井上円了はこの新しい教育事業を哲学館に付帯するものと位置づけていたが、のちに哲学館大学を辞任してからは、残りの生涯のすべてをこの修身教会運動に捧げていくことになるのである。

哲学館事件の影響

井上円了の遠大な教育構想のもとに出発した哲学館大学であったが、実際は経営上危機的な状況に陥っていた。事件の影響は、明治三十八年四月の卒業生に現れ、教育部第一科は前年度に比べて半減した。在学生数の推移(表6)は、事件が社会問題化した三十六年に大幅な減少がみられる。三十七年に哲学館大学となって一時増加した。しかし、その後はふたたび減少に転じている。在学生数の減少には、この間の日露戦争の影響は少なくなかったはずであるが、哲学館事件によって教員無試験検定の特典を失ったことや、事件をめぐって後に生じた内部の問題が災していたのは明らかである。

表6 在学生数の推移

年度	人数
明治35	288
36	207
37	322
38	228
39	141

(『文部省年報』各年度による)

すでに記したように、哲学館事件の前年、すなわち三十五年の時点では、哲学館は今後大学となって飛躍的發展が期待される学校の一つに挙げられていた。しかし、哲学館事件という不透明な政治的、思想的、社会的事件の渦中に立たされたことによって、その発展計画は挫折を余儀なくされたのである。

当然、井上円了は経営問題に腐心しななければならなかったが、これが神経性疲労につながり、夏頃には半日仕事をすれば半日の休息が必要であり、また夜になると大変疲れを覚えるというような状態となっていた。そこで、哲学館の初期の目的であった「哲学の普及」はほぼ達成されたと考えた彼は、以後は学校を解散して講習会組織に変更するという計画を立てた。しかし、これを数人に相談してみたところ、賛成するものはいなかった。すでに哲学館大学は組織として動きはじめており、彼個人の意志で左右できる時代は終わりに近づいていたのである。

特典の喪失が学生数の減少の大きな原因ではあったが、井上円了は哲学館事件後に立てた学校の基本方針である実力主義を貫くため、特典に頼るつもりはなかった。周囲のものが特典の再申請に触れると、「認可取り消しのために災厄をこうむりたる出身者に対してこれをなすに忍びず」と強く主張した。これは中島徳蔵を復職させたことと同様に、文部省に対する抵抗という意味もあった。

しかし、このような彼の方針は、講師や卒業生には十分理解されなかった。明治三十七年十月二十一日には出身者有志が、二十二日には同窓会が、二十八日には全講師が、それ

ぞれ無試験検定の再申請を行うように求め、十一月十日には哲学館事件で資格を失った加藤三雄ら三名も、再度特典を得るように勧めた。特典があるかないかは財政的基盤の脆弱な専門学校にとっては死活問題であり、とくに経営難の哲学館大学にとっては緊急な課題であった。

井上円了の退隱

特典をめぐる問題は、再申請を拒む井上円了と再申請を求める卒業生などとの対立であり、それは哲学館の存在そのものを根本から問うものであった。専門学校令によって哲学館は大学部を持つに至ったが、同時に社会的には国家の教育制度の枠内に位置づけられたことにより、以前のように創立者の意志と決断だけで運営できる時代ではなくなっていた。このような状況の中で、井上円了に対するさまざまな批難や中傷が出てきた。

哲学館は井上円了や井上家の私物ではないと批難するもの、あるいは哲学館大学は本当は仏教の一派の学校なのだという誤解なども生じた。彼は「世間は誤解の多きもので、いつかは疑惑も晴れるといていたが、卒業生からあからさまに批難されるに至って、

事態の深刻さを痛感した。新聞記者をしている卒業生に「近来一、二、哲学館を攻撃する者があり、あるいは何か、学校に関し、掲載を申し込む者があっても、採用してくれるな」と手紙を出すほどで、学内問題にさうとう神経を使わなければならない状況に追い込まれていた。

解決策として井上円了には二つの方法しかなかった。第一は、哲学館の独立自活、実力主義という新しい方針を捨てて、特典の再申請を行うこと。第二は、彼自身が学校経営から身を引くこと。しかし、彼は自ら定めた方針を変更することはできなかったため、哲学館のためには第二の方法を取るしかないことを、この時点で覚悟していたものと思われる。そして、その前に、彼は幼稚園から大学までの一貫教育システムをつくることを考えていた。明治三十二年に京北中学校を設立したのはその一環であるし、三十五年には「幼稚園論」で小学校就学前の幼児教育の重要性を訴えていた。大学と中学校ができたあとは幼稚園と小学校の設立によって、この教育事業は完成する。

彼はまず幼稚園の設立に着手、明治三十八年五月三日に自ら園長となって京北幼稚園を開設した。この直後、再び疲労に襲われるようになり、医師から「神経衰弱症」と聞くと、改

めて退隱への決意を強くした。しかし、彼は残る小学校の設立を自分の手で行い、理想的な一貫教育システムを完成させたうえで、それをしかるべき人間に譲渡しようと考えていた。夏休みには、静岡、山口、長崎、茨城の各県を巡講し、一時的に健康状態は回復したかに見えた。ところが、十一月には神経衰弱がぶりかえし、十二月に入ると自宅の庭で卒倒しそうになることが二度もあった。

井上円了が退隱を最終的に決断したのは十二月十三日であった。この日上野精養軒で哲学館大学記念会が開かれたが、この席上石黒忠恵と大内青巒の演説を聞いて決断した、と彼は記している。残念ながら演説の内容には触れていないが、結果的に彼に小学校設立を断念させ、学校教育から身を引く決断をさせたのである。この十三日という日付は、火災や特典の取り消しなど三大厄日の発生日であった。

哲学館の譲渡

井上円了はかねてより数人のものと相談して、前田慧雲を後継者と決めていたが、退隱決断から二週間後の十二月二十八日、彼は前田と三か条の契約を交わした。

(1) 哲学館創立の旨趣を継続すること。

(2) 財団法人になすこと。

(3) 他日学長を辞するときは、出身者中の適任者をもって相続せしむること。もし出身者中に適任者なき場合には、講師をしてつがしむること。

これによって、哲学館はすべて前田に譲られることとなった。また、京北中学校については湯本武比古を後継者とした。

彼がこのような契約を結んで学校を自分の子孫に相続させなかったのは、哲学館が私有物ではなく、社会国家の共有物であることを明確にするためであった。大学設立のために募金に奔走したことから、蓄財家とか冷酷な人などという評価を受けたこともあったが、それらをすべて払拭し、彼が「私人」と「公人」をはっきり区別してきたことを証明したのである。

明治三十九年一月一日をもって、井上円了は哲学館大学長と京北中学校長を辞職し、それぞれ名誉学長、名誉校長となった。一般に発表されたのは一月八日になってからで、学内の掲示板に「井上学長退隠の旨」が張り出され、突然のことに驚いている講師や学生全

員を講堂に集めて、井上円了は退隱のいきさつを説明した。また、雑誌にも「退隱の理由」という文を発表した。

哲学館大学は六月二十八日に「私立東洋大学」と改称し、七月四日には、井上円了との契約にしたがって、私立東洋大学財団が組織された。こうして、大学は創立者井上円了の個人経営の時代から、法人によって運営される時代に入ったのである。

退隱後の井上円了は、全力を修身教会に傾注し、東洋大学との関係は卒業式や同窓会などの行事に出席する程度となった。たとえ大学の運営上の問題を耳にしても、自分のほうから口を差しはさむことはなかった。ただし意見を求められれば即座に応じたというから、決して無関心だったわけではない。契約によっていっさいを後継者にまかせた以上、干渉すべきでないというのが、近代人井上円了の姿勢であったが、それがあまりにも徹底していたため、冷淡すぎるといわれることもあった。

「田学」

学校教育から手を引いた井上円了は、彼が重視していたもう一つの教育活動である社会

教育に専従し、全国巡講という形で展開していくことになった。巡講はそれ以前に明治二十三年から二十六年まで（第一期）、二十九年から三十五年まで（第二期）の二期にわたって行われたが、ここでは哲学の普及あるいは教育勅語の普及とともに哲学館の資金募集という目的もあった。退隠後の明治三十九年から大正八年に逝去するまで続けられた巡講は、国民道徳の向上のためであった。一月に辞職してから、その理由とされていた健康状態は回復に向かい、四月の神奈川県、京都府の巡講を皮切りに、修身教会の拡張と充実を目指して活動を開始した。井上円了は、建学の精神を引き継ぐ人に学校教育は委ねたので、再び一教育者という原点に立ち、かねてから重視していた社会教育活動に専念して、民衆の中へと入っていった。

井上円了は福沢諭吉を引き合いに出して、「余は世間の学者を貴族的と称し、余自身をば百姓的と唱えている。かつて福沢翁は平民的学者をもつて任ぜられたが、余はそれよりも一段下りて土百姓的学者である」と、自分の立場を明確に示している。また、福沢は一度叙勲を辞退したことがあるが、井上円了も大正時代に二度叙勲を辞退し、このとき「無位無官」で生涯を終え、権力の門に屈しない在野の学者・教育者であることを明らかにした。

彼は福沢よりもいっそう民衆の奥深くへ入り込んでいく自分の学問を「田学」と表現している。それはおよそつぎのような意味である。「紳士が田舎にいれば田紳（田舎紳士の略、どろくさい紳士という意味という。それならば学者が田舎にいれば田学といわれるべきである。これに対して、都会に住み、位階を帯び、官に雇われている学者は官学と呼ぶべきである。官学は高貴なものといえども、田学もまたいやしむべきものではない。鯛の刺身は貴人の膳に上るけれども貧民の口には入らない。しかし、豆腐の田楽は貴人にも貧民にも通じ、その調法なることは鯛と比べものにならない。田楽は田学に通じる。自分は田楽となり、学問の料理を貴賤貧富を問わず供給することを本分とする」

官学に対する田学という考え方は、晩学のもの、貧困者、語学力のないものに教育の機会を開放するという、哲学館創立の精神と同じである。そのときから比べると時代も社会条件も異なっていたが、井上円了は学校教育から社会教育の場に身を移して、再び原点に立ち返ったのであった。

南船北馬

修身教会運動は、欧米諸国の社会道德や実業道德のレベルまで、日本の民衆の道德や思想を向上させ、それによって日本人の改良を達成しようというのが目的であった。対象となるのは一般民衆であり、自ら田学と称したように、井上円了は日本の基盤を形成する地方都市、農村、山村、漁村などのいわゆる「地方」を重視した。

井上円了はその足跡を『南船北馬集』(二、十六編)に記録している。これによると、明治三十九年から大正七年までの十三年間に、全国六十市、二千百九十八町村を巡り、二千八百三十一か所の会場で、五千二百九十一回の講演を行い、聴衆は延べ百三十六万六千八百九十五人となっている。平均すると一年間に二百十八か所で講演し、一回の聴衆は二百四十七人になる。まさに南船北馬(各地をいそがしく駆け巡ること)の活躍である。その後の大正八年の巡講の結果を加えると、およそ講演回数約五千四百回、聴衆動員数百四十万人にもほり、当時としては実に画期的な規模の社会教育活動であった。

しかし、現代のような発達した交通手段はなかったので、旅には多くの困難がつきまと

った。国鉄の幹線はようやく通じていたが、幹線をはずれると軽便鉄道、馬車鉄道、あるいはトロッコに身をまかせ、さらには船や馬に乗って行かなければならなかった。例えば東京から宮崎県都城まで行くのに、汽車、川舟、馬車と乗り継いで、五日間もかかったと記録されている。また、そのような旅では夜明け前に出発しなければならぬことや、船が欠航して二日間も島に足止めされるようなこともあった。また、地方では宿泊施設も整っていないだったので、巡講先に宿屋がない場合には、小学校や役場の宿直室に泊まったという。

巡講中の井上円了は、汽車は三等で、弁当は握り飯と決めていたし、服装からカバンや時計などの所持品にいたるまで華美を排し、実用本位のものを用いていた。その姿を見て卒業生は「どう高く評価しても、山奥の村長か収入役くらいにしかみえない」と評している。

巡講は長期に及ぶことが多く、七十日、八十日、ときには百三十六日も休みなく講演を続けることもあった。したがって、自宅で過ごす時間は少なく、帰宅しても数日からせいぜい一週間で、またつぎの巡講に出発したという。

講演の内容

講演会の主催者や発起人はそれぞれの地元の市や郡の教育会、仏教団体、青年団、婦人会、実業倶楽部、農会、また辺境の土地では三か村連合や五か村連合などのようにいくつかの村の共同体、あるいは町長、村長、学校長などの個人、さらに有志の集まりなど、多種多彩であった。そして、各郡ごとに視学官が案内役となり、地元の哲学館出身者や旧友

表7 全国巡講の演題類別表
(明治42年度～大正7年度)

演題類別	回数	比率(%)
詔勅・修身	1,574	40.9
妖怪・迷信	911	23.6
哲学・宗教	595	15.4
教 育	306	7.9
実 業	261	6.8
雑題(旅行談)	210	5.4
合 計	3,857	100.0

出典：三浦節夫「井上円了の全国巡講」、『井上円了選集』第15巻の解説

などが随行した。いたるところで哲学館や京北中学校の卒業生たちの協力が得られたし、会場には必ず卒業生や館賓、あるいは講義録で学んだ館外生らが訪ねてきた。

井上円了は出迎えや見送りを好まなかったというが、各地ではそれぞれに趣向を凝らした歓迎をしたようである。船に万国旗を掲げて太鼓を打ち鳴らしたり、整列した子供たちが日の丸の小旗を振ったり、

威勢のよいラッパに迎えられたりした。

聴衆（彼は「公衆」と呼んでいた）は幅広く、老若男女を問わなかったし、彼も幼児や小学生に向かつても語りかけるなど、対象を限定しなかった。天候によっては聴衆が集まらない場合もあったが、逆に大相撲の地方巡業とぶつかっても会場が満員になることもあり、おむね盛況だった。これは官民を問わぬ主催者の協力があつたこともあるが、彼の話が人々を引き付けたことによるものでもあつた。

では、講演内容はどのようなものだったのだろうか。『南船北馬集』による明治四十二年度から大正七年度までの十年間にわたる演題が集計されている（表7）。修身教会運動の趣旨からいって、精神修養や道徳についての詔勅・修身に関するものが多いのは当然である。しかし、二位は妖怪・迷信に関する内容であつて、井上円了が「お化け博士」とか「妖怪博士」と呼ばれていたことがよく表れているが、それに比べて、社会教育を重点としていたために、哲学・宗教に関するものが少なくなっている。講演は一日に二回ないし三回も行っていたので、テーマは聴衆に合わせて変えていたようで、例えば、大正五年八月十日山形県酒田市の講演は、一回目が「精神修養」、二回目が「妖怪談」という題目で行

われ、地元紙の報道によれば聴衆は三百名を超えていたという。

妖怪・迷信については人気があったようで、主催者や聴衆からの希望によることもあった。山形県村山市在住で、井上円了の講演を実際に聞いた人はつぎのように当時を語っている。

「私は小学五年生、円了先生のお話はめずらしかった。親たちが迷信深く、夕方はさびしかった。暗くなるとこわかった。狐火、鬼火、人魂の話など、円了先生は絶対おっかないものでないと説かれた。それから大人たちのお茶飲み話でも、迷信らしいものがでると円了先生のお話になった。私は子供心に気持ち明るくなった。」

迷信に限らず、彼は講演を通じて民衆の生活経験に合理性を与えたのである。

井上円了の逝去

修身教会運動を精力的に展開していた井上円了は、日本国内ばかりではなく朝鮮や中国へも巡講を重ねた。大正八年五月五日、彼は満州（現在の中国東北地方）の巡講に出発、各地を回って、六月五日は大連で講演することになっていた。会場の西本願寺付属幼稚園に到

着したのは午後八時、休む間もなく三十分後には講演をはじめたが、その最中に脳溢血で倒れ、六日午前二時四十分に息をひきとった。満六十一歳であった。

この前年、卒業生たちが彼の還暦の祝賀会を開きたいと提案したところ、彼は「もう四、五年歩くと、日本全国津々浦々、残りなく歩き尽くすことになるから、そのときは全国漫遊完了祝賀会というようなことでもやってもらおうかと思っている。そのときまで、お祝いはお預けだ」と答えたという。最終的には全国巡講を完了することはできなかったが、死の間際まで講演を続け、その身を社会教育に捧げ尽くしたことは、彼にとって本望だったのではないだろうか。

彼は生前に遺書を作成していた。この中で「哲学堂は国家社会の恩に報ずるために経営せるものなれば、井上家の私有とせざる」として、かつて哲学館を社会の共有物としたのと同様に、民衆の力で建設された哲学堂公園を社会に還元した。「私」を捨てて「公」の利益を追求した井上円了の精神はここでも貫かれていた。

② 井上円了の教育理念

開放主義

井上円了はその生涯を教育に捧げ、さまざまな事業にエネルギーを取り組んだが、その活動を内面で支えていたのは信仰であった。彼は親鸞を開祖とする真宗の信仰者として寺に生まれ、僧侶として寺を継ぐことはなかったが、信仰は彼の中で生き続けた。

しかし、これまで見てきたように、彼は哲学館という公的な教育と自分の信仰とを明確に区別していた。それは、哲学館で宗教者を養成するというときに、仏教の宗派的教義にとらわれなかったことからわかる。「余の信仰告白」と題した一文で、彼は「余の真宗信仰は他の信者のごとく、猛偏屈なるにあらず」といって、自分は真宗を信じているが、他人がどの宗教を信じるかは問わないし、むしろ教団からの束縛を脱した自由討究・随意信仰であって、「開放主義」の立場であることを明言している。つまり、彼の信仰は、表

面は真宗であっても、その裏面には「純正哲学」に通ずる合理性を持った大乘仏教の精神が基礎にあったとみることができる。そして「開放主義」の原則は、彼の教育理念の根底に常に流れていた。

井上円了の人生と信仰をテーマとした研究者の一人は、つぎのように述べている。

「井上円了は全国各地で修身教会の結成を呼びかけて、全国巡講を行っているが、各地の支部を結合させて権力構造をもった全国的組織へ発展させるといふ方針は最初からもっていなかった。近代的組織論とは異なる点に、その特徴があり、教会の支部は実は仏教のサンガ（共同体）であったと考えられる。そして、それをつぎつぎと巡講する彼の活動は釈迦が説法をして歩いた形態と同じととらえられるので、その意味では井上円了の修身教会運動の根本精神は、心を残して名を残さず」という言葉で表すことができる。この言葉は哲学館創立以来の彼の行為をも象徴しているともいえる」

日本人の改良

これまで井上円了の教育に関するさまざまな活動と、そこに表れた思想について時間的

な経過を追って見てきたが、それらが近代日本の社会変動の中で形成され、発展してきたものであることが明らかとなった。以下、それを教育理念としていくつかの観点からまとめてみよう。

井上円了は当時のエリートの一人であったにもかかわらず、富や権力にはいっさい目を向けず、またそうした力に頼ることもなく、民間の一教育者として生涯を終えた。一般民衆の力に支えられて、まったく無資本のところから哲学館を起こし、幾多の困難を切り抜けて教育事業を発展させた。その過程において、彼が教育に期待したものは何であったのだろうか。

当時の日本の民衆は島国的で西洋や世界のことを知らず、迷信にとりつかれるなど、その生活は科学的合理性に欠け、小社会の経験の枠内で生活する人々であった。政府はこのような民衆に対して改善の手をさしのべることなく、近代化を急ぐあまりに、民衆を放置し、切り捨てる方針に終始していた。その中で、井上円了は民衆をしばしば愚民と慨嘆しながらも、民衆こそ自分にとっての教育対象としてとらえていた。そこには民衆を支えられて生活する寺に生まれたことも関係していたが、なによりも各地の民衆の中で生きる彼

の姿は実に生き生きとしていた。

民衆を教育対象と考えた井上円了は、人々を「遠大なもの」と「活発なもの」を身につけた人々に育成することを、日本人の改造、あるいは「改良」と称した。そして、さまざまな実業に従事する生活者に合理的な知恵を得る方法を教え、合理的な知恵の通路を開くだけでなしに、ここを通過して人々に「安心立命」を得させることを考えた。これが学問と宗教の二つによる日本人の改造として、井上円了の教育理念に位置づけられていた。

日本と比較して西洋の富と力の強大さを痛感した井上円了は、その差が精神面に発することを見抜き、日本人の改造においては、人間の生活を方向づけ、また支えている精神活動を重視した。すでに述べたように、当時の民衆の知見や生活は近代以前のまま取り残されていた。彼はこういう民衆を、精神の「改造」「改良」によって、「遠大なものと活発なもの」を身につけた人間に育成してこそ、当時の日本の課題であった富国強兵、国家の強大化、民力の強大化も達成可能となり、西洋先進諸国に追いつくことができると考えた。そして、その方法を教育に求めたのである。

私塾の精神

井上円了が教育の対象とした民衆とは、すなわち「余資なく優暇なき」人々であり、その教育活動の拠点は哲学館（学校教育）と哲学堂（社会教育）であつた。これは唯一の大学だつた帝国大学が、少数の国家的エリートを養成する機関として位置づけられていたことに對置されるものであつた。

哲学館は哲学専修の学校としてスタートしたが、決して哲学者を養成するところではなかつた。井上円了が重視したのは「哲学を学ぶこと」であり、彼はそれを「思想鍊磨の術」と表現して、人間の精神活動を活性化することだとした。つまり、ものの見方や考え方の基礎を身につけることに重点を置いた教育だったのである。

明治三十五年頃の教育界では、つぎのように問題点が指摘されていた。

「帝国大学においてすらも教師はただ生徒の脳髓になるべく多くの知識を注ぎ込まんとし、生徒もまた試験に及第せんがためになるべく多くのことを暗記せんと勉めておるのである。ゆえに今日の教育は開發主義にあらずして注入主義であり、思考的でなくして器械

的である。そもそも大学なるものは知識を与うるところであるのか、そもそも知識を得るのみちを教ゆるところであるのか」

このような教育界にあつて、哲学館の教育は開発主義であり、知識を得る方法を教えることにあつた。そして、そのために哲学や思想を広く教授したが、その際には「自由討究」を重んじたのである。

以上は知育（知識教育）の面であるが、哲学館では徳育（人間教育）も重視された。井上円了は学校を「人の人となる道」を学ぶ場と考え、知識を与えるだけではなく、感性を磨き人間性を高めることによって、バランスのとれた人格を形成しようとした。これを具体化したのが寄宿舎であり、朝夕開かれた茶会であつた。彼は自ら学生たちと対話し、人間性を養う環境をつくつたが、ここでは学生一人ひとりの人格が尊重され、彼らがどの立場、どの主張をするかは、それぞれの選択・決定にまかされ、強制することはなかつた。彼のこのような人間交流を重視した教育は、「私塾の精神」に基づいたものであつた。

哲学の応用

井上円了は常に学生に「空論を止めて、事実をもってせよ」と語り、実践的姿勢を求めた。そして、卒業生が社会において哲学を応用することを願っていた。哲学を学んだ人間が社会に出て、その成果を発揮することができれば、それによって日本社会の活性化をうながし、彼の目的である日本人の改良につながると期待したのである。

しかし、近代初期においては、実用的な知識や技術の要求度は高かったものの、哲学という理論的学問を学んだ人にとっては、職業選択の幅が限定されていた。彼は哲学を社会で直接応用できる職業として教育家と宗教家を考えた。特に教育家には、日本の中等教育を振興・発展させるため、また哲学館の精神を普及させるために、地方に学校を設立することを望んでいた。

社会が発展するにつれて職業選択の幅は広がり、哲学館事件以後は卒業生が哲学を応用する職業の範囲を従来よりも拡大することを奨励した。「諸学の基礎は哲学にあり」という基本的な考えのもと、基礎である哲学を学んだものがさらに専門知識を学んで、哲学の

応用に結びつけてくれることを期待していたのである。

開放的な教育手段

井上円了の教育活動は学校教育と社会教育とからなっていたが、学校教育では、人材養成という観点から、一貫性のある教育システムを目指し、哲学館を頂点として京北中学校と京北幼稚園を設立した。しかし、小学校は設立されず、システムは完成しなかった。一方、学校以外に教育の場を求めるため、自ら民衆の中に入って行き、修身教会運動という社会教育を行った。

彼の教育活動は開放的であって、民衆の教育のためにさまざま機会と手段を利用した。そこでは現実の可能性を検討したうえで、目的達成のための手段については柔軟に対応した。例えば、哲学書院における出版事業、講義録による通信教育、市民のための日曜講義などがあり、また実現はされなかったものの、正規の学校とは異なる簡易中学や変則中学などの設置も考えていた。

教育手段の開放性の例として、芸術の活用も挙げられる。しかも、それを日露戦争の最

中に提唱したところに彼の独自性が見られる。彼は、戦争中にはだれも芸術の必要を考えないだろうと前置きして、「余は戦後の国民に対してことさらに美術美学の必要ありを思う。そのわけは戦後は一時必ず残忍過酷の風行われ、喧嘩殴打殺人等が流行するに相違ない。この弊を防ぐには今より美術を奨励させなければならぬ」と述べ、社会教育における芸術の効果的活用を訴えた。

彼の柔軟な姿勢は、社会状況の変化への対応にもみられる。例えば、日本の近代化が進んで、アメリカやアジア近隣諸国へ日本人が盛んに進出していくようになったとき、哲学館の学制を改革して、それぞれの国において積極的に活動できる人材を養成するという方針を取り入れている。

自由開発主義

以上のような井上円了の教育理念の基本的性質は、その独自性という点において、私立学校の特性と表現するにふさわしい内容を持っていた。当時の私学は官学中心主義の教育体制の中で、一面では帝国大学の補完的役割を担わされていた。しかし、その反面で、哲

学館は「自由開発主義」の方針に基づいた独自の教育理念で運営され、官学とは違った人間の教育を目指していた。それを具体的に示しているのは、哲学館事件以後に展開された実力主義の教育であり、「独立自活の精神を持つ純然たる私立学校」という言葉である。

退隠後、修身教会運動に専念していた井上円了が、再び学校へ戻るように要請されたことがあった。大正七年、第一次世界大戦が終結した年で、社会情勢も学内事情も問題を抱えていたので、大学に復帰してその再建を果たすように求められたのである。彼はそれに対して、いつになく厳肅な態度でこう答えた。

「御説一応もつともなるが、現代政府の教育方針は依然官僚統一主義にて、自分の宿論たる自由開発主義に相もとれるゆえ、老齢に加鞭して再びその任に当たるも、到底諸君の希望にそうあたわざるは必然なれば、先年隠退当時決心せしごとく、普通一般の通俗教育に一身を捧げ、当初の志望は後世他の人によりて遂行を期するよりほかなし」

井上円了は、いずれ時代が変わったそのとき、哲学館創立以来の方針である自由開発主義の教育が実現されることを期待し、すべてを未来に託したのである。